
異世界のKING OF THE FOREST

龍門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界のKING OF THE FOREST

【Nコード】

N1272K

【作者名】

龍門

【あらすじ】

四つの大国が住まう大陸、グランドアース。その大国の一つガランド帝国が、謎とされてきた森の攻略を始めようとする。それを阻止する為、ケストニア王国が帝国に対し開戦を申し込む……。フリーの殺し屋・黒き鎌使いは帝国に雇われ森に入る。任務は『危険分子を狩れ』そして、そこで異世界からきた少年・瑠王 千と出会う！この出会いが世界を変える！！

ラブコメ？シリアス？ファンタジー！

主人公はもちろん異世界人です！

殺し屋 狼 少年（前書き）

ファンタジーに初挑戦！！説明べただけど楽しんで欲しい！！
下手なので様々な意見、どしどし下さい！！！！

殺し屋 狼 少年

目標は・・・闇の中。

少し骨がいるかもしれんな。

黒い髪、黒い瞳、黒い服。そして・・・巨大な黒い鎌を持つ女が、
【森】の前に立つ。

世界は荒れていた。四つの大国。

【ケストニア王国】

【魔法国クレワード】

【神域ラメロ】

【ガランド帝国】

四つの大国は何年もの間、いがみ合い互いの出方を窺い、動かず戦わずのままであった。

それが一つの国の動きにより、この均等とも言える力関係が崩れる。

大国の一つ、【ガランド帝国】が、【森】の占領を行おうとしているからだ。

【森】

一つの大陸

【グランドアース】と呼ばれる、四つの大国が住まう、強大な大陸。その大陸の中央に、国々以上の領土を持つ、【森】がある。

【森】と言う通り、一見は普通の巨大な森だが、様々な噂や、逸話がある。

【森】には不思議な力が有り、その【森】に入れば様々な力が手に入る。

とまあ、他愛も無い与太話が殆どだ。

けれども、あまりにも手付かずのままが続き過ぎ、各国の王は、この与太話を信じきってしまったていた。

その一例が先程の話に戻り、大国の一つの【グランド帝国】である。

【ガランド帝国】王、サニルツマ「テントル」ガランド。

この男が、世界の与太話を信じてしまったのが、この荒れた世界の始まりだった。

【帝国】の王は、この【森】を欲しがり、他の国を凌駕する力を欲した。

そして、王の命令により、【森】の占領作戦が始まったのだけれど、誰しもが予想しなかった事が起きてしまった。

【森】に入った探索・調査班が、皆死んでしまったからである。

この事で、王は嘆いた。だが、その半面歓喜もしていた。

探索・調査班だろうと、人並み以上の武術・魔術は使えるし、訓練も受けている。

その者達が死んでしまった。

王はこう考えた。

『森には何かが有る。力が！全てを統べる力が！』

王は、森の大半を焼き払う事を命令した。

この命令が、他の大国を動かす決定的な事である。

【森】は、この四つの国の全てに隣接しており、この森を占領しようとしていると言う事だけで、戦争は始まる筈だったが、【帝国】はあくまでも【森】に執着していた。

この状況の中、安易に【帝国】を攻められず、攻めるチャンスを探っていた。

そんな中、【帝国】が【森】を焼き払おうとしている事を知った、大国の一つ【ケストニア】が動いた。

【ケストニア】は【帝国】に開戦を申し込み、【帝国】もそれを受けた。

今思えば、【帝国】の王はこれも目的の一つで、【ケストニア】はまんまと王の作戦にはまったと言っても間違いないだろう。

この開戦で、国々の均衡は崩れた、と思われていたが、もう二つの国が、開戦以外の方法を取った。

【魔法国クレワード】は中立の立場に立ち。

【神域ラメロ】はまったくこの戦争に干渉しないと発表した。

この宣言により、この戦争は実質、【帝国】と【ケストニア】の戦争になった。

【森】・【帝国】領側。

【森】 攻略部隊。 攻略と言っても焼き払おうとしているだけだが。

「おい！あの女はどこだ！？」

鎧身に纏った男が、辺りを見渡しながら尋ねた。

男が探す女は居なかったらしく、更に大きな声で言った。

「あの戦闘狂が！！」

「誰の事だ？」

男は振り返った。男の後ろには、全身を黒で固めた女が立ってい

る。

髪、瞳、服装。けれども、この場には似合わない格好である。

「どこに行っていた!？」

男は女に対し、怒鳴った。

「五月蠅い男だ。ちょっと今から入る、森とやらを見てただけだ」

女は面倒くさそうに説明した。

男は内心、憤怒していた。

何故、この女がこの場に居るのかと。何故この女を、上の人間は雇ったのかと。

だが、その怒り以上に男は驚いていた。女が噂以上に美女であるからである。

顔立ちも、スタイルも、どこかの姫君と言っても過言ではないぐ
らいの美しさである。

「何だ？」

男があまりにも無言であつたから、女が尋ねた。
尋ねられ、男は我にかえり、女に言った。

「勝手な行動はするな!『黒き鎌使い』!!!」

『黒き鎌使い』この世界では有名な殺し屋。

金さえ払えば、どんな汚い仕事であろうと、行つ戦闘狂である。

この、森攻略作戦に何故か上の人間は、この女を使えと言ってきた。

男はふと、目線を変えた。

この場の中央に、二人だけ、違う鎧を着た者が居る。

赤い鎧。それだけで目立つが、この鎧は【帝国】最強部隊『紅蓮騎士団』の証でもある。

この作戦に、『紅蓮』は必要ではないのだが、これも上からの命令だ。

すると、男の元に、もう一人男が走り寄って来た。

「作戦準備できました」

その言葉を聞き、男は一度今までの思考を捨て、この作戦の事だけを考えた。

「よし。出番だ・・・『黒き鎌使い』」

自分の名を呼ばれ、『黒き鎌使い』は、舌で唇を舐めた。

私が聞かされている今回の作戦内容は、『森に入って、危険分子

を狩れ』だった。

あやふやだ。誰をどうしろと言っただ。

ぶっちゃけると、内心面倒だった。

報酬が莫大の金額で、思わず受けた仕事だが、まさかこの【森】に入るとは思わなかった。

溜息が何度も出る。

まあこの【森】に居る人間を狩れると言っ特典だけで良いとしよう。

この【森】は力の象徴でもある。この【森】に住まう人間は、無敵になれる。などの噂にもなれそうのない話が、各国で流れている。

私も正直信じてはいない。けれども、もしかしたらがある。この【森】は、今まで何故か誰も手を付けずにいた。だからあながち、全て嘘とも言えない。

！？

ふと、異様な気配を感じた。戦闘態勢。

『黒き鎌使い』が掌を広げた。その広げた掌の上に黒い塊が浮く。すると、その黒い塊は状態を変化させ、巨大な鎌に変貌した。

魔法。

この世界の魔法は、全ては解明されていなく、たまに名も無い様な魔法を使う者が現れたりする。

今、『黒き鎌使い』が使った魔法も、一見すれば物質召喚と形状変化の魔法の合わせ技の様に見えるが、そう決断させないのが、物質召喚を行う場合その召喚に見合った対価が必要であるからである。だが、この女はそれを無しにやってのけた。この時点で、この魔法に名は無い。

『ほお、なかなかの使い手だな・・・』

声！誰だ？

竈った、響く声。

「誰だ？」

尋ねたが、返答が無い。

「答える気無しか？」

すると、目の前の草むらから、目を疑うモノが現れた。

「お前・・・」

現れたモノは、狼。だが、普通の狼では無い。この狼は・・・。

『女・・・ゴーストウルフを見るのは初めてか』

現れた狼は、まるで笑った様な声で言った。

ゴーストウルフ。実態が全て謎で、霊の様に実体が無い為、ゴ―

ストの名が付いている。

今、私の目の前にお伽話の一つが現れている。
私は喜んでいた。

「とんだ掘り出し物だ」

舌で唇を舐める。

『愚かだ』

ゴーストウルフが言つのと同時に、『黒き鎌使い』は動いていた。

両手で鎌を持ち、横から鎌を振り、ゴーストウルフの首を狙う。

あの細腕で何故こんなスピードが出せるのかと言うぐらいの速さ。

もらった！

鎌の刃っ先はゴーストウルフを捉え、確実に首を取った様に見えた。

「な！？」

今、お伽話がリアルだと気付く。

ゴーストウルフは黒い煙を纏い、消えた。

「なるほど。これがゴーストの由縁か・・・」

驚きはしない。見てしまったモノは信じる主義だからだ。

だが、本当にあんな事が出来るとは。魔法ではないのか？だが、魔

力は感じられない。

『黒き鎌使い』は、辺りを見渡しながら考える。

では、アレは何だ？魔法以外の何か？

『どこを見ている？』

後ろから声がした。振り返る。そこには先程消えたゴーストウルフが居る。

「面白い」

ゴーストウルフは、簡単に私の事を殺せた。消えた瞬間に、私の喉元を食い千切れれば良いのだ。まさかゴーストだから触れる事が出来ない、何て事は言いまい。

「本当に・・・この森は愉快だな」

心底笑った。今まで、死に近づいた事はあったが、死を確信した事は無かった。

それが、今体験する事が出来た。本当に・・・愉快だ。

この思考が、『黒き鎌使い』が戦闘狂と呼ばれる由縁である。

何よりも、死を感じようとする異常者。アブノーマルな思考自体が、この女の原料力。

戦えれば、殺し合えれば。

好きな事をして、金を貰える。簡単な思考で、異常な思考。

『黒き鎌使い』が鎌を構える。

『フン！・・・隙だらけだ』

ゴーストウルフが、見込み違いだと言う様に、言い捨てる。すると、真横から異常なスピードで何かが突っ込んできた。

「何！？？」

不意に真横から蹴りを食らった。

「グハアッ！！」

息が出来ない程の衝撃。とつさに身体強化の魔法を使ったが、それでもこの衝撃。

そして、そのまま押し倒され、喉元にナイフを突き付けられた。

完全に目の前のゴーストウルフだけに集中していた。まさか他にも居ると思わなかった。

だが、それ以上に愕然とした。

今、私に馬乗りになりナイフを向けているのが人間だと言う事に、しかも若い。

「き・・・貴様は？」

横っ腹に受けた打撃の痛みが引かない。

『セン。殺せ』

ゴーストウルフが、この少年に言う。

まさか、ゴーストウルフに人間の仲間が居ようとは。

私は、ゴーストウルフに見て、その後この青年に視線を変えた。

少し見とれた。こんな【森】に住んで居る人間なら、野性的な野蛮な奴を想像するが、この少年は綺麗な顔立ち、綺麗な・・・私と同じ黒い髪、黒い瞳。

その時。

ドガァーンッ！！！！

その音がなつた方に視線を向ける。

「大・・・砲・・・だと？」

その視線の方には、赤い光が森を照らしていた・・・。

殺し屋 狼 少年（後書き）

やつべ・・・また新しいの書きちゃった。

他の二つもまだ完結してないのに・・・一本完結して調子に乗っちゃった・・・。

だから、この作品は多分そんな早く更新？と言うのか、それが出来ないと思います。

てか、異世界って言うてるのに全然だよ。主人公あれじゃん！黒き鎌使いじゃん！

まあ、主人公は彼ですから・・・。

ええー楽しんでください！そして次も読んでください！
では、ありがとうございました・・・。

少年 狼 殺し屋（前書き）

書きやすい……。ふと思う作者。（笑）

少年 狼 殺し屋

【森】の外が騒がしい。

複数の人間の声が聞こえる。

「ディガース」

視線を落とす。その先には黒い狼が一頭居る。

『あちら側は、帝国の方だな。最近よくこの森にちよっかいを出してくる連中だ』

ディガースと呼ばれる狼は、めんどくさそうに言う。

「ここからそう遠くないな・・・」

少年は呟く。

『行くのか？あんな奴等では、この森に傷は与えられないぞ？』

面倒なのか、ディガースが尋ねる。

「いや、人間の中にかなり力を持った奴が居る様な気がするんだ」

少年は眉間に皺を寄せながら言う。

センが言うならそうなのだろう。だが、センがここまで言うのだ。かなりの使い手か？

ディガースは悩んだ。まだ、この子を表に出したくはなかったからだ。

けれども、少年の表情を見て、ディガースは何も言う事ができなかった。

『しょうがない……。行くぞ！』

そう言い、ディガースは走り出した。
その後を、少年は追う。

凄いスピードで森の中を駆けて行く。

狼なら可能かもしれないが、それでも凄いスピードである。
けれども、それ以上に驚きなのは、その狼の速さに人間の少年が、遅れを取らず付いて行っている事だ。

この姿を見ると、本当にこの少年は人間なのかを疑う。

『あそこだな』

走り出してから、数分。何十キロある道のりを数分で駆け抜いた。
それはもはや異常としか言えない。

ディガースは森の中から、外を見る。

そこには、何十名の兵士が居る。

ディガースの目から見ても、この中に使い手が居る様には見えなかった。どれもこれも三流、二流に見えたが、センは指を指した。

「あそこの赤い鎧を着た一人・・・」

赤い鎧・・・アレか。確かに見た目はやりそうに見える。いや、センが言うのだから、かなりの使い手だろう。

「それに・・・あそこに居る女・・・」

そう言い、センが次に指した人間は、全身黒の女であった。

「アレがか？」

驚いた。こんな鎧だらけの中、普通の服を着た、女が居るなんてだが、その女は異常な気を纏っていた。

「なるほど・・・じゃ～他はカスか？」

ディガースが尋ねる。センはコクリと頷く。

「あの二人さえなんとかすれば良いのか・・・」

すると、黒い女がこの森に、一人で入って来た。

「何だ？」

「解らない。でも、他の奴は動かない」

確かに、他の兵士達は黒い女を見ているだけで、一緒に入ろうとはしない。

「先に・・・今入って来た女を・・・」

センが言う。その意見には賛成だ。

『ヨシ。行くぞ』

ディガースとセンは、森の奥に入って行った。

『こんなにも呆気ないとは・・・セン。お前のカンも落ちたな』
ディガースが呆れた様に言う。

「貴様・・・何だ！」

センに押し倒され、喉元にナイフを突き付けられていると言うのに、黒い女は未だに自分の立場を解っていないかった。

「何故、人間がゴーストウルフと共に居る！」

女の問いに、センは眉一つ動かす事はなかった。

「喋れないのか？」

女がセンに尋ねる。

すると、眉一つ動かさなかったセンが、首を横に振った。

「そうか……。やられたよ。ゴーストウルフにだけ気が行っていた。まさか他に、しかも人間が居るとは……。不覚だ」

そう言い、女は手で自分の目を覆った。

「泣くのか？」

センが尋ねた。

ディガースはヤバいと思った。

『セン！情を移すな！！そいつは敵だ！』

ディガースが言うと、センはディガースの方を見て、首を横に振った。

すると、センは女の上からとき、立ち上がった。

『おい！』

ディガースは怒鳴った。

センが人の涙に弱いのは今に始まった事ではない。やはり、俺がすぐに殺せば良かった……。ディガースは悔いた。

「何の真似だ？」

女が尋ねた。すると、センは答えた。

これが、初めて『黒き鎌使い』がセンの声を聞いた瞬間である。

「どうせ、逃げる気だったんだろ？」

第一声は、センの声の綺麗さに驚いたのと、自分の心を読まれた事の、ダブルショックだった。

「お前・・・何者だ？」

『黒き鎌使い』が尋ねる。

「お前じゃない。俺は・・・センだ」

機嫌が悪そうにセンが言う。その言葉と不機嫌そうな顔に、『黒き鎌使い』は間が抜けた様な気がした。

「ハハッ・・・そうか、そうか。それは悪かった。セン」

名前を言うと、センは微笑んだ。

その微笑みは、さらに『黒き鎌使い』にショックを与えた。

あまりにも可愛過ぎた・・・もう、この時点で『黒き鎌使い』の戦意は失せていた。

「お前の名は？」

センが問う。

『黒き鎌使い』はいきなり名を聞かれ、一瞬言おうか言わないか悩んだが、行っても実害は無いと思い、答えた

「メア!! ナイトメアだ」

メアが自分の名を言うと、またセンは笑った。

「そうか・・・メアか」

この笑顔は卑怯だろ・・・メアは心に思った。

『おい! お二人さん。何を悠長に自己紹介しているんだ?』

ディガースが呆れた様な声で尋ねた。

「ごめん」

センはディガースに謝った。

ディガースはメアを見つめていた。それに耐えられず、メアは聞いた。

「何だ?」

『いや、センが自分の名を言ったと言う事は、貴様を殺さないと言う事だ。だから俺的には、さっさと消えて欲しい訳だが?』

ディガースが言った。その言葉に、メアの眉間に皺が寄る。

メアがディガースに何かを言おうとした時、センが喋った。

「コイツは、ディガース」

ディガースを見ながらメアに言った。

『なっ！？俺の名を教えるな！！こんな人間に！！』

ディガースが怒鳴った。だが、センは笑っている。

ディガースも、この顔には勝てない様だ。一度鼻を鳴らし、赤い明かりに視線を変えた。

『アレは・・・貴様の仲間の仕業だろ？』

ディガースがメアに尋ねる。

「いや、私は金で雇われているだけだ。仲間何て思っていないよ。まあそれはあちら様もそうだったがな」

メアが不敵に笑う。

「成程・・・」

センが言う。それにディガースが尋ねる。

『何が成程なんだ？』

センはメアを見て答えた。

「目的は多分二つだろ。この森を焼き払う事と、メアを殺す事」

センの答えは限りなく答えに近かった。

「成程・・・。だから私には詳しい依頼内容がなかったのか・・・。それに、あんな莫大な金だ。あの時点で気付くべきだったな」

メアは腕を組み、頷きながら納得する。
すると、デイガースが鼻で笑いながら言う。

『フンツ！金に目が眩んだのか？これだから人間は』

一瞬メアが不機嫌な顔をしたが、それは直ぐに戻った。
この時メアが考えている事は、どう自分を騙した者達を殺すかであった。

そこで、メアに一つの提案が浮かんた。
メアはセンに近づき、言った。

「なあ、セン。協力してくれないか？」

あまり人を頼るのは好きではなかった。大抵の事は自分で出来るし、なにより男が嫌いだからである。けれども、この少年。センには他の男同様の拒絶反応は示さなかった。

拒絶よりも、どちらかと言うと好意すら抱いている。

「協力？」

センが首を傾げる。

「そうだ！協力だ」

すると、デイガースが怒鳴った。

『ダメだ！！こんな女に協力して何の得がある！？』

ディガースの言う事は最もであった。出会ったばかり、しかも敵に協力するのはあまりにも危険で、愚かだからである。

「待ってくれ、ディガース」

センがディガースに言った。

そして、メアに尋ねた。

「確認だ。メア・・・いや、敵として聞く」

センの目の色が変わる。殺す事を何とも思わない者の目。

「何だ？」

メアは脅威した。こんな少年が、私以上の目をするなんて・・・。

「貴様は、あいつ等と仲間ではないのだな？」

「違う」

暫く見つめ合う。すると、センが大きく息を吐いた。

「ヨシッ！協力しよう。メア」

目の色が普通の少年の目になった。これだけでも良かったと思う。

「ありがとう。セン」

センはまた、笑顔を見せる。その笑顔を見て、思わずメアも笑っ

てしまった。自然に、ごく自然に。その事が、メアにとっては赤面する程の驚きであった。

思わず、メアは両手で顔を覆った。

「どうした？」

センが尋ねているが、答える事ができなかった。

『壊れたんじゃないか』

ディガースが言う。

「五月蠅い。狼」

ディガースの言葉で、赤さが引いた。

「で？協力って何だ？」

センがメアに尋ねる。

すると、メアが不敵な笑みを浮かべる。

「簡単な事よ・・・あの連中を潰す」

至極簡単で、至極難しい事でもあった。

だが、センとディガースも不敵に笑みを浮かべた。どうやら賛成の様だ。

二人と一頭は、赤い光を見つめた。

少年 狼 殺し屋（後書き）

少し雑になってきたか？ふと思う。

確認してないから多分ですが、誤字脱字があると思います。

ええー今回は、前回の話のセンとディガース視点と言う感じで話が進んで、途中で前回の話の続きに戻ります。

何故こんな感じにしたのかと言うと、あのまま話が進むと、永遠メア視点のまま話が進むと思ったからです。

なので無理やりでもセン視点で書きたかった。一応センが主人公だから。

それにしても・・・全然異世界出てこない・・・。ヤバイな。

ちゃんと書きますが、そこまで進むのにあとどれ位の話数が要るのか？

悩みの種が一つ増えました。

てか、更新？遅いとか言ってたくせに結構早い感じで更新？した。ホント、嘔吐きだな・・・。

ここまで読んでくれた方。ありがとうございます。

次もよろしく願います。

それでは・・・

隊長 少年 戦（前書き）

色々言わないといけない事が・・・。
後書きで・・・。

隊長 少年 戦

「燃やせ！ここら一帯焼け野原にするぞ！！」

鎧を着た男が、【森】を指しながら部下達に命令する。

部下達は火炎放射気のような物で【森】を焼いている。

「急げ！時間は無いぞ！」

【森】の中に砲弾を打ち込む。【森】の中に存在する生き物を殺す為である。

「隊長・・・このような作戦意味があるのでしょうか？」

赤い鎧を身に纏う女が、もう一人の赤い鎧を着た者に尋ねる。

赤い鎧。この場に居る兵士は全て銀色の鎧を身に纏っているが、この二人だけ赤い鎧を身に纏っている。

「命令だからな・・・」

もう一人の女は顔を見せているから女だと解るが、隊長と呼ばれる者は顔が見えず、性別が解らない。がだ、声からして女ではないだろうか。

「ですが・・・こんな作戦に意味があるとは思えません」

女の顔には、この作戦への不満が溜まっている様に見える。

「素直過ぎるぞ・・・」

隊長と呼ばれる者が、注意をする。

「すいま・・・あれは!？」

謝ろうとした時、【森】の中から人が出てきた。

あの姿・・・『黒き鎌使い』

「おいおい・・・何だこれは?こんな作戦聞かされてないのだが?」

『黒き鎌使い』が辺りを見渡しながら言う。だが、表情は微笑んでいた。

「貴様・・・生きていたのか」

この部隊の実質隊長である男が、舌打ちをしながら『黒き鎌使い』に言った。

「まるで死んで欲しかったと言っている様に聞こえるが?」

『黒き鎌使い』に睨まれ、男は言葉を無くすが、強気に喋る。

「それで、危険分子は殺したのか?」

そう男が言うと、『黒き鎌使い』は笑った。

「危険分子？そんなのが本当に居ると思うのか？」

腹を抱えながら笑う『黒き鎌使い』に対し、男は剣を向けた。

「……やはり……私も殺す気か……」

男は頬をつり上げ笑った。

「貴様も殺す。それがもう一つの作戦なんだとよ。俺もさっき、あそこに居る紅蓮の騎士様に聞いたんだ」

男はそう言い、私を見た。

気色の悪い顔を私に向けるな……。内心苛立っていた。
こんな所に自分が居る事が。

「それじゃー死んでもらうか」

男は『黒き鎌使い』に対し、剣を振り上げようとした時、『黒き鎌使い』は笑った。

「ふふっ……はっははははっ！！！！」

その笑いは、まるで狂ったように壊れたように笑っていた。

「……イカレたか？」

男が気色の悪い笑みを浮かべたまま、問う。

すると、『黒き鎌使い』は瞬時に右手に黒い鎌を作り、男の首を刎ねた。

「なっ!!」

「貴様!!」

「ひぁぁぁぁ!!」

驚く者、すぐさま剣を抜く者、腰を抜かし悲鳴を上げる者。様々だ。

「ふふ・・・殺されるのは・・・お前等だよ」

そう言い、『黒き鎌使い』は走り出し、近い兵士の首を次々と刎ねて行く。

「これが・・・黒き鎌使いか・・・」

私は内心喜んでた。あんな糞男に殺される者では無い事が解り。喜んだ。

女が男に支配される時は終わったのだ。女は男より強くなれる事を、今ここで皆に知らしめる事が出来るような、そんな気がし喜んだ。

「クソッ!! 強過ぎる!!」

兵士達の首が次々と刎ねられて行く。

「キャリン!! 我々も行くぞ!!!」

隣で、啞然とこの様子を見る部下に言う。

私の言葉を聞き、キャリンはハッとした様な顔をし、私の後に続き『黒き鎌使い』へ走り出した。

「貴様等！！敵は一人だ！怖気づくとは、不拔け共！！！」

私は走りながら怖気付く兵士達に活を入れる。

「う、うおおおおお！！！」

兵士達に少し活が入る。だが、それもまた一瞬で消しさる。

「ぐわっ！」

「な、なんだこいつはああああああ！！！」

声がする方を見る。すると、黒い影がこちらに向かって走って来るのが解る。

「あれは・・・？」

人間。しかも少年だ。

その少年は、短剣一本でこの場につっ込んで来る。

しかも、その少年を次々と兵士をなぎ倒し、こちらへ猛スピードで走って来る。

「何だあの少年は？」

すると、少年はいきなり止まり、口笛を吹いた。すると、【森】の中から大量の狼が飛び出してきた。

『貴様等俗物は、ここで我々の餌にしてくれる！！！！』

狼が喋った・・・。

「ゴーストウルフか!？」

文献や噂では知っていたが、まさか本物が居ようとは・・・。

だが、このタイミングでの登場。まさか『黒き鎌使い』の仲間なのか？

『野郎共!!ここに居る人間一人残らず食い干切れ!!!!』

ゴーストウルフの声を聞き、他の狼達が一斉に兵士達に襲いかかる。

数ではこちらが勝っていると思ったが、今の状況じゃ数は意味をなさない。

「クソっ!」

狼達は、凄いスピードで兵士達に襲いかかる。

『おい!女!邪魔だ!』

ゴーストウルフが『黒き鎌使い』に対し毒を吐く。

「黙れ狼。貴様も殺るぞ?」

仲間ではないのか?けれども他の狼がこの女を襲わない所から見ても、仲間と見て間違いないだろう・・・。

では・・・あの少年は?

少年は凄いスピードで此方に来る。

少年は私に短剣を投げつけた。

凄いスピード……。私はそれを辛うじてかわす。

「貴様！レディア隊長に！」

私の前にキャラリンが立つ。

キャラリンは自身の槍を少年に向かって突く。だが、少年は走りながら姿勢を低くし、その槍の下を走る。

「なっ！」

少年はキャラリンの腕を掴み。横に投げる。軽々と。女だとは言い、鎧を着ている為かなり重い筈だが、少年は片腕で投げ飛ばす。

「きゃあああああ」

キャラリンは宙に舞い、そして地面に叩きつけられた。

少年は地面に刺さっていた剣を抜き、すぐさま此方に向かって走って来る。

「私と殺る気か？面白い」

私も少年に向かって走り出した。

先に私が剣を真横に振り、少年の首を狙う。だが、少年は上体を反らし、それをかわした。そして、少年は身体を反らした状態から、私の顔めがけて蹴りを入れてきた。

「クッ！」

片腕で防いだが、何て威力だ。身体が浮く。

「調子に乗るなあああ！！！」

私は少年に向かって走り、剣を上、下、右と振る。だが、その全てを少年は紙一重でかわす。

「クソッ！」

仕方ない。こんな所で使う気は無かったが。

私は腰に手を回し、短剣を取り出し、刃っ先を少年に向けた。

「貫け」

短剣の刃っ先から風の槍の様なモノが飛び出し、少年を貫く。

少年は衝撃に耐えられず、後ろに吹っ飛ぶ。そしてそのまま地面に倒れる。

『セン！！』

ゴーストウルフが叫ぶ。

やはり仲間だったか……。

だが、これを食らって生きている筈は……。

「な……」

目の前の光景が信じられなかった。

「何故・・・立っている？生きて・・・いる？」

確実に風の槍はこの少年を貫いた筈だった。けれども、少年の服は破けてはいるが、無傷に近い状態で私の前に立っている。

「甘いな」

少年が呟く。その言葉に私は言葉を無くした。

なんだ・・・なんなんだこの少年は？

「お前は・・・何者だ？」

私の声は震えていた。恐怖なのか解らない感情が私を襲う。

少年は一度口から流れる血を舌で舐め、呟く。

「次は・・・こっちの番だな・・・」

そう言い、少年は自身の首にかかっているネックレスを握り、何かを呟きだした。

『ダメだ、センー！ここで使っな！！』

ゴーストウルフが叫ぶ。だが、少年は呟き続けている。

「森の力よ・・・我と共に・・・」

すると、少年が私の視界から消えた。

「なっ!？」

消えた? 何だどこに?

「こつちだ」

後ろから声が。

私は瞬時に振り向いたが、少し遅かった。

少年は腕を振り、その手が私の兜に触れ、兜が宙に跳ぶ。

「クッ・・・」

すると、少年は驚いた様な顔をした。

私は体勢を立て直す為、一度少年から離れる。だが、少年は動こうとしない。

「何だ・・・?」

すると、少年は辺りを見渡し、口笛を吹いた。それを聞いたゴーストウルフが叫ぶ。

『野郎共! 引き揚げるぞ!!』

狼達はすぐさま【森】に帰って行く。

「な、なんの真似だ!？」

私は剣を構えながら少年に問う。

すると、少年は柔らかない笑顔を見せ、言った。

「ここは、アンタ見たいのが戦う場面じゃない」

そう言い、少年も【森】の中に消える。

いつの間にか『黒き鎌使い』の姿も無かった。

私は辺りを見渡す・・・。

そして、キャリンに走り寄り、生きているか確かめる。

「良かった・・・」

息はある。

もう一度辺りを見渡す・・・。

全滅に近いだろう。生きている者は数名。100近く居た兵士が・・・ここまで。

だが、もしかしたら私もここに転がる死人の一人になっていたかもしれない。

あの少年が戦うのを止めたから。

何だったんだ・・・。あの少年は・・・。

安心感と疑問に、頭は疲れ切っていた。

隊長 少年 戦（後書き）

戦闘シーンがいくら書いても慣れない。

てか、謝らないと。

途中から何故か紅蓮の隊長さん視点に。

そして、戦闘の薄さ……。

駄目だな。

この話の詳しい事は次ぎに解ります。

何でメアとセン達が共闘してるのかとか、何でセンがいきなり強くなったのか、何でセンが攻撃をやめたのか。

全ては次か、次です。

ここまで読んでくれてありがとうございます。

次でもよろしくです……。

森の力 掟 森の王（前書き）

ネタが・・・。

森の力 掟 森の王

何だあれは？最初は疑問。次に疑惑。そして困惑。

目の前で起こる戦いは結構なモノだった。だが、それ以上に驚いた。

『ダメだ、センー！！ここで使っな！！』

狼が言った一言。そして、センが唱えた呪文の様な言葉。

「森の力よ・・・我と共に・・・」

呪文にしては短過ぎる。なにかの契約に必要な言葉か？それともまた別の何かか？

まあ、その疑問は良いとして、問題は森の力と言う奴だ。

センはどこから見ても人間だ。

ゴーストウルフと話したり、共に居たりするのが若干人間の域を超えているが、それでも人間には変わらない。

だが、それは一瞬にして消え、目の前の光景が信じられなかった。

「な！？」

センが消えた。視界から消えた事により、紅蓮の隊長は驚きを隠せず、あまりにも間抜けな声を出していた。

だが、私には視えていた。

センは消えた訳ではない。紅蓮の隊長の視界から消えただけ。

簡単。凄まじいスピードで紅蓮の隊長の後ろに回り込んだのだ。
これだけの事なら、私は少し驚くぐらいだ。

だが、問題は人間であるセンがゴーストウルフと同じ力を使った
事だ。

幽霊の様に身体が透けている。センの後ろの森が見える程だ。

人間の筈だ。だが・・・。

「こつちだ」

センが紅蓮の隊長の後ろに回り込んだ。

『おい・・・女』

狼が私に何か言っている。無視と言う手もあるが・・・。

『もう終わる。引け』

そう言い、視線を森に向ける。

「私が森に居るのは不愉快の様に言っていた様な？」

私がそう言つと、一度舌打ちし、言った。

『あの姿を見た奴は、本当は殺しているのだがな・・・』

そう言い、狼はセンを見た。その目はあまりにも悲しい目をしていたような気がした。

だが、それ以上にお前何て簡単に殺せると、言われた様で少し頭にきた。

「お前みたいなのに殺れると思うか？」

狼の事は見ず、センを視ている。

だが、この時狼は多分この場に居る誰よりも最強になっただろう。

『小娘・・・貴様を食い千切るなど造作も無いわ。我を愚弄するの
も程々にした方が良くぞ・・・』

声質が変わった。それに『俺』から『我』に変わった。

それに、異様なまでに冷たい。これが本気か・・・いや、本気のほんの入り口なのかもしれない。

「底が見えないな・・・」

苦笑しながら私が言うと、狼は笑った。

『ふっふっふっ・・・底など見るモノではないだろう・・・良いからさっさと森に入れ』

今の私じゃこの狼には勝てない。そう悟った。

私は一度森に視線を変え、その後またセンに視線を変えた。焼き付ける為。そして後で問つめる為・・・。

私は森に向き、森の中に入って行った。

森の中。あの場から引き揚げている最中。

『おい・・・何故使った？』

隣を走るセンに問う。

センは一度困った顔をした。何か理由を考えているような顔にも見えなくはない。

「なんだろ・・・そうしたかったからかな？」

理由がガキ過ぎる。甘やかし過ぎだったか・・・。

『そんな理由で森の力を使うな。それ以上は例えセンでも俺等がお前を殺さないといけない』

結構物騒な事を言っているのは分かる。だが、これが掟なのだ。森の力はこの森を保つ為の力。その力をむやみやたらに使つと、自然の摂理が崩れる。

それはこの大陸の崩壊と言っても過言ではない。それ程の力は人を欲に溺れさせ、破滅させる。

それはゴーストウルフも例外ではない。
ゴーストウルフも人間と同じ位の知能を持っている。その為、欲が無い訳ではない。

人間みたいに、金・女・地位・名誉なんてモノはどうでも良いが生については異常なまでの執着を見せる。それは人間も同じだろう。生きているモノはいずれ死ぬ。それも自然の摂理。
破る事の出来ない鉄則。だが、その鉄則が更に死への恐怖に拍車をかける。

その為、力を欲する。死なない為。生き残る為。
その欲は人間と同じだ。

その為、強大過ぎる力は、誰でも狂わす。
だから、私利私欲で力を使ったモノは、例え仲間・恋人・家族どんな関係だろうとも殺さないといけない。

それが、掟。森にとっては、掟は最強の矛であり、盾でもある。
時に護り、時に我々に牙を向ける。

それと上手く生きて行かないと、この森では直ぐに死ぬ。

「解っている・・・掟は守る」

センが前を見ながらそう、呟く。それだけで安心。
だが、今は気がかりと言うか・・・。

『あの女はどうする?』

女とはつまり、『黒き鎌使い』と言われる殺し屋だ。

あの女俺と居る時、ずっと俺の首を狙っていた。

無視出来る程の力じゃない。あれも十分異常の類に入る猛者だ。

『どうする？』

もう一度聞く。早く答えが欲しいからだ。

センは何度か首を傾げ、悩んでいた。そして、やっと口を開いた。

「一度確かめる」

『何をだ？』

少しの間があく。その間はディガースにとってキツイものだった。殺すのか、生かすのか。もちろんディガースは殺す派だ。けれども多分センは自分とは逆だろうと思っていた。その為、答えを聞くのが少し怖くなっていた。

「アイツがこの森に害をなすかどうか・・・」

アイツ・・・。名前を呼ばなかった。これは敵とみなしている時だ。

センは仲間の事は必ず名前で呼ぶ。だが、敵には結構ぞんざいな扱いをする。

「害をなすと判ったら？」

「・・・殺す」

冷徹に。

ディガースは心の中で呟いた。

「流石は・・・森の王」

森の力 掟 森の王（後書き）

今の登場したキャラの中でディガースが最強です。
でも本気は中々出しません。

ええー今回書いてる時に気付いたのですが、文章雑だな〜。それと設定。伏線もクソもない。。。

てかまだ全然話進まない。これからまだまだ登場人物増えるのに。全然だな・・・あと何百話書くつもりなのか。

考えたら鬱に。まあ〜やれる所までやりますがね。多分・・・。

ええー次も頑張ります・・・。

敵 仲間 騎士（前書き）

戦わないなあゝ

敵 仲間 騎士

森の中と言う事は解るが、どこかは解らない。

元々、森の詳しい地図などはこの世に存在しない。この森に入った人間は皆行方不明とか、死体となるからだ。

ゴーストウルフじゃない狼達の後を追ってはいるが、ひしひしと殺気を感じる。

多分狼達の殺気だろう。一応は共闘したが、仲間となった訳ではない。私は今でも十分この森にとっては部外者なのだろう。

まあ、この殺気もそれ程悪いモノじゃない。どれも強く、確実に私の命を狙っている。

実に面白い。

戦闘狂は走りながら、唇を舐めた。

『何だ・・・人間の気配がするぞ?』

一頭のゴーストウルフが辺りを見渡しながら言った。
その側に居る、白い狼が答える。

「ホントだねこの匂い・・・美味しそうだよ・・・」

ゴーストウルフは基本黒だ。そして声は籠っている。

だが、この白い狼の声は逆に、トンネルの中で喋っている様に反響して聴こえる。

『だが、その気配の周りに同胞が居る』

黒い狼は眼を細めながら言う。

「ホント・・・それに、ディガースと王の匂いも・・・これは面白い事になっているわね・・・」

白い狼の頬が吊りあがる。動物でありながら、表情だけで笑っていると判る。

その姿は異様であった。

二頭の狼は互いを見た後、森の奥深くに走って消えた・・・。

何時まで走るのだろうか？

流石の『黒き鎌使い』も少し音をあげていた。

ここ何時間は走っている。それなのに、周りの景色は変わらない。

はあ、もう良いよ・・・疲れた。

少しどころじゃなく、完全に音をあげている。

すると、森の中に笛の様な音が響いた。

すると、メアの前を走る狼達がいきなり止まった。

何だ？ここがゴールか？

止まった狼達は一斉にメアに視線を向ける。

それは完全に殺意だった。

一瞬メアは生唾を飲んだ。

これ程かと。複数とは言え、これ程の殺気はこれまであまり経験無い事だった。

貴重な体験はメアの好奇心を煽るだけだが、メアは戦いたい気持ちを抑え込んでいた。

今ここでこの狼達に刃を向けると、きっと、あの狼とセンも敵になる。それはあまりにも不利。多分一瞬で肉塊にされるだろう。それだけは回避しないといけない。

その為、ここは我慢だ・・・。

すると、後ろから誰かが来る気配がした。一瞬攻撃態勢を取ったが、それが知っている気配だと気付き、警戒を解く。

木々の間から現れたのはセンとディガース。だが、雰囲気は完全に只事ではなかった。

その異様とも言える雰囲気、メアは少し恐怖していた。

凄過ぎるな……。これがこの少年か……。

恐怖した事が無いとか、そんな事は言わない。普通に恐怖する。

メアは自分の事を最強とは思ってはいない。自分より強い奴には普通に恐怖する。だが、それと同時に歓喜する。

まだ、自分より強い者を殺せると、メアはそうやって生き延びてきた。どんな強者にも屈せず、そして葬って来た。

殺し屋をしているのも、強い奴に会う確率を上げる為。

『黒き鎌使い』メア「ナイトメアは戦いでしか自分の価値を見出せない。

その為彼女は戦う。

だが、今メアの心を襲うのは恐怖だけだった。

いつもなら湧きあがる歓喜は、これでもかと言つぐらい静まっている。

そう、『黒き鎌使い』と恐れられる存在のメアが、少年に恐怖している。

額から尋常じゃない汗が流れている。

逃げたい。初めての感情。だが、逃げられない。

少年・・・センはジッと、メアの事を見ている。それは殺意の眼。

メアは今、自分の認識が甘かったと気付く。

確かにセンは強い。だが、舐めていた。それはセンが見せた笑顔のせいである。

あの笑顔のせいで少なからず戦意、敵意が無くなってしまっていた。

この共闘は仲間になると言う意味ではないのに、完全に油断してしまった。

メアは死を覚悟していた。センが放つ殺気は、周りに居る狼のそれを凌駕している。

勝てない。死。それがメアの脳内を駆け巡る。

メアは目を瞑った。

「その覚悟は死に対してか？それとも戦う覚悟か？」

センが問ってきた。まるでメアの心を読んだ様に。だがメアは、それ程驚きはしなかった。

「いや・・・死かな・・・」

何だろうか・・・。恐怖はある。だが、この少年にならと言っ気持ちもある。

実に不思議な気分だ。

「問う」

センが冷たく問う。

それにメアは頷くだけ。

「貴様は、我々の敵か否か？」

貴様・・・。名を呼ばないと言っ事は、今の状況ではやはり私は敵か・・・。

少しショックであった。何故ショックかは解らないが。

少し間が開く。メアはどう答えようか迷っていた。
何を言っても首を刎ねられそうで・・・。

メア心で自分に活を入れた。

どうなっても死ぬなら、素直に。

「敵では・・・ない・・・」

真っ直ぐな瞳。殺意も無く、濁りも無い。綺麗で、美しい黒い瞳。

センは一度目を瞑り、そして開いた。

そして、センは満面の笑みを浮かべた。

「ようこそ。メア＝ナイトメア。この森へ」

その笑顔と言葉を聞いて、メアは腰を抜かした。

まさかこの私が腰を抜かすとは。

メアは、はっはっはっ……と笑った。

メアは心の中で笑った。

今日一日でどれ程の初体験が有ったか。これは貴重なのだろうか。

だが、今のメアにはただただ安堵するだけであつた。

すると、ディガースがメアの前へ出る。そして嫌みの様に呟く。

『貴様の様な戦闘狂が、あの様な瞳を持っているとは……驚きだ』

ディガースはそう言い、センを見た。

センはまだ満面の笑みである。

先程まで、凄まじい殺気を放っていた人物とは思えない程の、無垢な笑顔だった。

「私は助かった様だな……」

思わずメアは呟いてしまった。

それを聞き、ディガースは笑った。

『ハッハッハッ！！貴様も普通の人間と同じだな！！』

馬鹿にされているが、メアは反論する事ができなかった。

それよりも、メアはセンの顔から目が離せずにした。

素直に、セんに好意を持っている自分が居る事に、メアは気付いていた。

圧倒的な力。圧倒的な恐怖。

この少年は人を惹き付ける何かを持っている。そう感じた。

「では、メア。この森の中心に案内しよう」

そう言い、センはメアに手を差し伸べた。

メアは少し顔が赤くなった。不意にも。

森の中心？今はそんな事はどうでも良い。
メアはセンの手を握った。

広い空間。それ以外にこの部屋に対しての感想が浮かばない。

帝国中心部である帝都。その真ん中に位置する場所に、皇帝の住むゾーンアレス城がある。

「紅蓮騎士団隊長レディア＝デニギロと在ろう者が……。まさか負傷し帰って来るとは」

負傷と言うか、私には殆ど外傷は無い。あるとしたら……。

ただっ広い部屋。壺やら、絵画などが何点があるが、それ以外に何も無い。

その部屋の真ん中に、赤い鎧を身に纏った女が立っている。

帝国特有の金色の目。そして金色の綺麗な髪。

こんな鎧など着てなければ、美しい女性である。

だが、真っ赤な鎧がこの女を禍々しい程変化させている。

レディアは上を見上げた。

高い位置から私を見下ろしながら、白髪の老人が眉間に皺を寄せながら言う。

老人など言ったらダメか……。軍事部のお偉いさんだ。つまりは上司。

今回の作戦は見事なまでの失敗。簡単だと言われていたのに、森
攻略も出来ず、『黒き鎌使い』まで始末出来ず。

この上司としても、自分の面目が潰れたと言う事だ。

「まさか貴様とも在ろう者がこんな簡単な作戦に失敗するとは・・・

」

何とでも言え。何十年も戦場にも出ず、その高い所から見下ろす
事しか出来ない愚者め。

私は男が嫌いだ。それと同じで踏ん返り返る者も嫌いだ。自分の
権力を行使する事しか出来ない、逆らえば直ぐ死刑などほざく。

この帝国には貴族が居ない。いや、居ただけれど現皇帝が今の
座を奪う為、革命を起こした。その時、この国に居座っていたゴミ
とも言える貴族を排除したのだ。

まあ、全ての貴族と言う訳ではない。現皇帝に賛同した者は、貴
族の名を捨て、今もなおこの国に居る。

この私の前に居る男も元貴族だ。まあ、貴族の名を捨てたにして
も、結局は何も変わって無いが・・・。

「レディアー・デニギロ。貴様はどうする？これから。私もそれ程鬼
ではない。一度の失敗で貴様の首を刎ねようとは思わん。で・・・
どうする？」

回りくどい言い方だ。

。私は右手の拳を地面に付け、そして頭を下げる。形だけだが・・・

「紅蓮騎士団隊長レディア＝デニギロ。もう一度この私にチャンス
を」

「ふふ・・・良からう。貴様にもう一度チャンスをやろう・・・」

何が良からう、だ。貴様がそう言えと言っていたのではないか・・・

「はっ。隊長の名に懸け、騎士の仕事を努めたいと思います」

「下がって良い」

「はっ！」

レディアは立ち上がり、そして軍事部のお偉いさんに背を向け、
部屋から出て行った。

本当を言うと、レディアは別にこの作戦をもう一度やりたいとは思
っていない。

思っている事は一つ・・・あの少年だ。私の【終風】を受け、死な
なかった唯一の男。

私のプライドはこれでもかと言うくらいズタズタだった。

「待っている・・・少年よ」

レディアは長い廊下を歩きながら、名も知らない少年に次を誓っ

た。

敵 仲間 騎士（後書き）

ええーまずは説明。黒いゴーストウルフは『』です。白いゴーストウルフは「」です。特に意味はないです。はい。次に城の名前ですねえゝゾーンアレス城。ゾーンというのは響きだけでつけた。アレスって言うのはギリシャ神話の戦いの神です。別にこの物語りにギリシャ神話関係ないのですが、まあ、なんとなくです。そして終風ですね。これはレディアが持っていた短剣の名前です。この短剣は追々説明します。そして作者の中での一番の問題。メアのキャラ。戦闘狂というキャラは後付けです。何か弱そうな感じになっってしまった。もっと強いのに。まあゝ周りが化け物ということで。強さ的にはメアが本気出せば小さな小国を簡単に血の海に出来ます。それにしてもメアのキャラが定まらない。どうしようもつとぶっ飛んだキャラにしようと思っただのに・・・普通だ。てか・・・主人公センなのに全然セン目線で書いてない。ぶっちゃけ書けない。今セン目線で書いてしまうと大部分暴露してしまうので。暫くはディガースとメア目線が続きますかな・・・まあ、でも一応主人公はセンです。長くなりましたが、次もお願いします

黒 白 黒（前書き）

全然進まないなあゝ色々ばら撒いてるけど、全然回収できない。
いつ完結するんだろ・・・これ。

黒 白 黒

神域ラメロ・国境付近

「ダメですよ！」

少女の声。白い布を纏っており、顔は分からないが声からして性別は女。

その少女が慌てている。

「心配ないさ。これはただの暇潰し」

これもまた女の声。こちらも白い布を纏っていて顔は分からないが、声からしてもう一人の少女とは違い、大人っぽい声質。

「ひ、暇潰し！？尚更ダメです！ちゃんとした理由が無いのに」
少女は必死に、もう一人の女性を引き留めようとしている。

だが、女性はそのを聞こうとはしない。
「私が行かないとでも？」

口元が見えた。ニヤリと笑っている。

「ダ、ダメです！！」

必死になる少女だが、もう無駄だろう。

女性は小走りに森の中に入って行った。

「あつ！ダメ・・・もうつ！」

少女も追いかけて森の中に入って行く。

サアー・・・サアー・・・風が吹き、森の木々の葉が揺れる。不吉にも、空には鳥が飛んでいた。

「こつち」

セんに案内されながら、森の奥深くに入って行く。

すると、狼が私の横を並走する。

『おい、女。気いつけるよ？』

狼が言う。だが、意味は解らない為、尋ねる。

「何をだ？」

『お前はまだ森の王に会ってない。会っていない奴は例えセンが認めても敵だ。いつ襲われても可笑しくない』

森の王？そんなモノが居るのか……。だが、それは人なのだろうか？

「要人すれば良いのだろ？」

センの背中を見ながら言う。

『まあ、簡単には死なないと思うがな』

意外な一言。私は吃驚し、狼を見た。

『俺は認める所は認める主義だ。それに、別に俺はお前の力を過小評価も過大評価もしていない』

褒められているのか、貶されているのか解らない。だが、ここは褒められている方向で。

暫く走っていると、センが止まった。

「どうした？」

私はセンに尋ねた。すると、センは目の前の樹に手を翳した。そして、何かを唱える。

「『
』」

何を言っているのか解らなかった。ゴーストウルフの様に竦っている様な声だったが……。

すると、狼が説明してくれた。かなり省いて。

『アレは結界解除だ』

……それだけで納得すれと？

聞きたい事は山ほどあったが、今は森の王とやらに会わなくては。

『止まれ!』

不意に声がした。しかもこの声は、ゴーストウルフと同じ。

「あらら、本当に居るよ」

もう一つ声が。だが、この声はゴーストウルフとは違って響く。

『……バズテルとクウィか?』

狼が辺りを見ながら言った。

『ディガース……お前が余所者と一緒とは……しかも王も一緒とは』

王? 誰が? ここに居るのは、狼とセ……まさか!?

「王よ……何故そんな奴と?」

「客人だ」

センが言う。

『俺は納得出来ないぜ? その女からは過去に嗅いだ事のある匂いがする……我等同胞を殺した……』

すると、木々の奥から黒い狼が現れた。

『女……バズテルの眼を見るな……一瞬でこの世界からおさらばだ』

狼が言う……。

「魔術の何か、か？」
狼に尋ねた。

『あえて言うなら・・・森の力だ』

イマイチ理解出来ないが・・・私の命の危機だと言う事は解る。

メアは戦闘態勢に入ろうとした時、木々からもう一匹の狼が出てきた。

だが、その狼は他のゴーストウルフとは違い、白い。

「なっ！白いゴーストウルフ！？」

メアは思わず叫んだ。

文献などでは、ゴーストウルフの色は黒と伝えられている。

「白がそんなに珍しいかい？お嬢さん」

白い狼が言う。声からして雌なのだろうか？

『おい！クウィー！何故出てきた！？』

バズテルと言われる狼が怒鳴る。

「王とディガースが認めたんだ・・・気に喰わなくてもここは我慢だよ？バズテル」

そう言いながら、クウィーと呼ばれる白い狼がメアを見て言った。

「・・・お嬢さん。もしアンタが可笑しな行動を取ったら・・・殺すわよ？」

背筋が凍った。

私は頷くしかなかった。

「……なら良いわ……。バズテル、解ったでしょ？例えアンタでも王とデイガース相手に殺し合いなんてしないでしょ？」

クウィがバズテルを見て言う。バズテルはそっぽを向きながら答える。

『ふん！今は生かしてやる』

そう言い、バズテルは消えた。

「では、私も。王よ、先に行って待っています」
そう言つてクウィも消えた。

『……良かったな、女』
デイガースが安堵する。

「何がだ？」

『もし、クウィもお前を殺す気だったら、お前は確実に死んでいる』
やはり……。先程の殺気は生易しいモノではなかった。

「クウィは強いよ。唯一完璧な魔術を使えるゴーストウルフだから」
センが言う。だが、完璧な魔術？

「完璧とは何だ？」
私は尋ねた。

「……後々解るよ」

そう言ってセンはまた奥に入って行った。

『女。ここから先はあまり自ら行動するな。王の許可が下りるまでは』

ディガースが歩きながら言う。

「王って、センの事ではないのか？」

先程のバズテルと言う狼も、クウィと言う狼もセンの事を王と言っていた。

だからてっきりセンが王かと……。

『センは王候補だ。今は試験中だ』

「試験？そんなモノが？」

『イレギュラーだからな、アイツは。だから本当ならしくなくても良い試験をしている』

そう言って、狼は少し悲しそうな顔をした。

だが、その表情の意味を、私はこの時は理解出来なかった。

「ところで……試験って何だ？」

私は狼の後を追いなから尋ねた。

ちなみに、センはもう見えない。先に行き過ぎ。

『能力の制限だ。今のセンは実力の半分に抑えられている』
そのまま続ける。

『あの赤い騎士との戦いで、センが使った力……お前は見えていただろ？』

そう尋ねられ、頷いた。

確かに見えていた。『紅蓮』の隊長には消えた様に見えたかもしれないが、私からは見えていた。

『本当なら完全に消える事が出来るのだが、試験中だったからな』

「それで使っなくなって言ったのか？」

『それもあるが、もう一つの理由としてはまだ他の人間に見せるのを避けたかった』

「何故？」

『色々……とだ』

何か言えない理由でもあるのか？まあ、それでも結構教えてくれたから良いが。てつきり嫌われていると思ったが、そうでもないらしい。

『着くぞ』

言われ、前を見た。

——何だアレは！？

目の前には、結界が広がっていた。

『行くぞ』

そう言い、狼は結界の中に入った。すると、狼の姿が消えた。

「カモフラージュの為の結界か・・・」

私は後を追う様に、その中に飛び込んだ。

黒 白 黒（後書き）

雑に進み過ぎだなあゝ・・・。
もつと考えないと。最近『ラッキー』の話ばかり考えてるからなあゝ。

てか、全然話進まない。まだ森の中で、王にも会ってないよ。
早く温泉シーン書きたい。ラブコメりたい。キャッ ♪ キャッ ♪ したい。

狼とか・・・もう良いよ飽きたよ。

何で狼にしたのかなあゝ！女の子出してえー！！

てか戦えよ！

まあゝ愚痴はここまでにして、
次もよろしくです。

お詫び

ええ、本当に勝手ながらこの話を終わらせる事にしました。

様々な理由があるのですか、ええ、と言うならば終わらせると言うよりも書き直すと言った方が良いかもしれません。

現時点で考えていた内容では無理だと自己判断。
勝手にスイマセン。

その為、もう一度練り直し書き直す事にしました。
それが何時になるかは解りませんが・・・。

今度からはもっと考えてから書くようにします。
結構途中リタイヤが多いので・・・。

申し訳ありませんでした。
お詫びします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1272k/>

異世界のKING OF THE FOREST

2010年11月16日09時46分発行